



復興への強い思いを



震災から10年目の節目を迎える追悼式

# 東日本大震災追悼式

3月11日、「如水典礼さくらホール」において、浪江町東日本大震災9周年追悼式を行いました。今回は「新型コロナウイルスに関連した肺炎」の感染拡大防止を考慮し、規模を縮小しての開催となり、遺族・来賓合わせて18人の列席となりました。式の始めに、参加者全員で黙とうをささげ、犠牲者への冥福を祈りました。

吉田町長は式辞で、昨年は、イオン浪江店のオープンや請戸漁港の水産業共同利用施設完成など、復興に向けた歩みが形となって見えた1年であり、今後も、町の復旧・復興へ歩みを進めていく姿を、強く発信し続ける決意を述べました。

続いて、遺族を代表して遺族会会長の叶谷守久さん（福島市在住）が追悼の言葉を述べました。

遺族代表 遺族会会長

叶谷 守久さん

追悼の言葉

本日ここに、来賓および県内外から遺族が集い、令和最初の浪江町東日本大震災追悼式が挙行されるにあたり、遺族を代表して謹んで追悼の言葉を申し上げます。先の東日本大震災から、9回目の追悼式を迎えました。2011年3月11日、この風光明媚で穏やかな浪江町を、震度6強の大地震により15メートルを超える津波が襲来し、私たちのかけがえのない、大切な家族が大勢犠牲となりました。中には、津波から逃げるため、道なき道を懸命に走りながら、その途中で津波にのまれ、命を落とした方。あるいは、大量のがれきに何とかしがみつきのながら、途中で力尽き命を落とした方。そして、家族の手を携え必死に逃げながらも、大津波がその手を切り離し、一方だけが津波にのまれた方。また、地震により建物が倒壊し、その重みで体を圧迫され、命を落とした方もおられます。

こうして大切な命が一瞬にして失われてしまった一方で、愛する家族が津波にのま



れていく惨状を目の当たりにしながら、どうすることもできずに、ただ見届け、立ち尽くすだけしかできなかった家族の無念さも決して忘れることはできません。最愛の家族を失い、絶望と無力感にさいなまれながらも、亡くなった家族の分まで必死に生きようと、慣れない避難先で、少しずつ歩んだこの9年間はずっとつらく、苦しい日々が続いてまいりました。様々な人たちの思いを、私たち遺族は、次の世代へしっかりと語り継ぐ責務があります。元号が平成から令和へと変わっても、震災を経験した私たち遺族の思いは、いつまでも変わることはないでしょう。

結びに、東日本大震災で亡くなられた方のご冥福を心からお祈りするとともに、参加者の皆さまのご健勝を心からお祈り申し上げます。遺族代表の言葉といたします。

## 行方不明者の捜索が行われました

東日本大震災から9年となる3月11日、福島県警察本部主催による行方不明者の捜索が行われました。

今回は、「新型コロナウイルスに関連した肺炎」の感染拡大防止のため、規模を縮小しての実施でしたが、消防職員を含む61人が棚塩地区の海岸で、行方不明者の手掛かりを捜索しました。

地震発生時刻の午後2時46分には、参加者が現地で犠牲者に対し黙とうをささげました。



どのような小さな手掛かりでも